

備中松山城とその城下町 完成にかかわる藩主たち

史跡 備中松山城跡

国の史跡として指定されている備中松山城跡は、臥牛山内に八カ所（下太鼓丸跡、中太鼓丸跡、小松山城跡、相畑城戸跡、天神の丸跡、大松山城跡、大池跡、切通及び番所跡）あります。一般的に備中松山城といえは小松



大久保坂より望む備中松山城と城下町

山城跡とその中に残された天守、二重櫓、三の平櫓東土塀のあわせて三棟の建造物（いずれも国重要文化財）と、平成九年（一九九七）に復元された二棟の櫓、四カ所の門、総延長一九六メートルの土塀のことと考えられることが多いと思います。しかし、臥牛山の麓には、県指定の史跡として備中松山城御根小屋跡（現県立高梁高等学校）が残され、その南には城下町が広がっており、本来、これらをあわせて「根小屋式城郭」である備中松山城と考えられます。

備中国奉行小堀正次、政一（遠州）父子のあとを受け、備中松山城を中心に現在の高梁地域を治めた備中松山藩の成立は、元和三年（一六二七）、池田長幸（一五八七～一六三三）が因幡鳥取（現鳥取県鳥取市）から六万五千石で所替えとなり、この地を領したことにあります。長幸は同四年（一六二八）、町家のうち、それまでの本町、新町に加え、下町、鍛冶町の取り立て（建設）を行いました。また、紺屋川以南の武家町も池田時代に整えられたと考えられています。寛永元年（一六二四）には高梁川河口西岸付近の干拓事業をはじめています。このように近世の藩経営を整えていく中、寛永九年（一六三二）、長幸は四十六歳で亡くなりました。

続いて嫡男長常（一六〇九～一六四一）が家督を相続し、寛永十五年（一六三八）、島原

の乱直後の肥後天草（現熊本県天草郡苓北町）へ備中成羽藩主山崎家治（一五九四～一六四八）が所替えとなると、長常は成羽の地を一時預かっています。この時、山崎家中の一部は備中に残り、山崎家ゆかりの寺院である龍徳院、寿覚院を成羽から松山城下に移したことがなどが伝えられています。これは、池田、山崎両家に姻戚関係があり、また、池田家の成羽在番などの縁があったからだと思われるます。翌年、成羽には常陸下館（現栃木県筑西市）から五万石で水谷勝隆（一五九七～一六六四）が移ってきました。

寛永十八年（一六四二）、長常が三十三歳の若さでなくなり、幕府に領地没収となりました。備後福山藩主水野勝俊（一五九八～一六五五）が備中松山に在番したのち、水谷勝隆が成羽から備中松山へまもなく所替えとなりました。勝隆をはじめ勝宗（一六二三～一六八九）、勝美（一六六三～一六九三）三代に及ぶ水谷家は、町家の南町、東町の取り立てをはじめ、備中松山城（山城）の修築、高瀬舟航路の整備、高梁川河口西岸の大規模な干拓など次々と完成させていきました。

水谷家も元禄六年（一六九三）、後継ぎがなく、絶家となりましたが、池田家、水谷家の残した遺産はその後の備中松山藩の基礎となりました。

（文・歴史美術館学芸員 加古一朗）